IAMAP 総会（1985）実感

IAMAP/IAPSO Joint Assembly（1985）に気象学会国際学術交流基金の補助金を受けて4名の方が出席された．報告書に添えて，次のような感想をお寄せいただいたので，それらをここに紹介します．

（国際学術交流委員会）

研究者の数について

東大・理　林　祥介

このたび気象学会国際学術交流委員会の援助を受けてIAMAP/IAPSO Joint Assembly に参加してきました．今回は特にお盆にぶつかってしまったので，ハワイはひどい混雑ぶり，かつ相場でありました．私自身は資金集めに出おくれて，困ったものだと思っていたところに国際学術交流基金から75,000円が得られまして，少なくとも登録料（$200）と Banquet 代＋$\alpha$をうめることができました．

会場に出て思い知らされたことは，米国で仕事をしている研究者の人口の多さでありました．毎年の J. A. S. と M.W.R. を机の上につんでみて，J.M.S.J. と比較すれば（注・内容ではなくて質量又は体積）明らかなのですが，実際にそれらの人々を一堂に集めて見ると迫力がちがいます．人口が多いことの結果としてのおもしろい現象は，たとえば日本や中国の人と同じことを彼らが発表してもその“うけ”方がちがうということになって表れます．彼らには一流の研究からかなり“ショーモナイ”研究まで発表を行っても，それなりに評価し激励してくれるだけの人数がいる．同じ level のことを日本人が，たとえ日本国内でやっても，support してくれるだけの人間の数（観客）はおりません．一言で言えば“土俵”（その良し悪しは別として）が向こうにあるということでしょうか．

驚異なのは，やはりこれだけ多くの人数を育て，生活させ，何かわけのわからん仕事をさせるだけの財力があるということでしょうか．日本でも最近はようやくGNP が積分されてきて，ある種の“基礎科学”にはお金が回るようになってきたようですが，大学の我々のところのような分野，特にメカを扱うのではなくソフトに生きる分野では逆に年々，日本の平均的経済力および technology との gap が目立ってくるようです．日本の研究者たるや，もう少し貪欲にその存在意義を主張していくべきでありましょう．科学をやることが何らかの生産活動であるとするならば，その再生産活動に必要な資本の分配を当然うけなくてはならないはずです．active な研究者の数をふやして土俵を作るということは不可能でしょうか？

こちらに土俵がない以上，あちらに時々出向いて巡業せねばならぬとすれば，国際交流基金のような補助基金をうまく育て（現状ではあまりにかわいい），かつ使って行くことが必要とされるでしょう．

もっとコミュニケーションを！

東大・理　中島健介

IAMAP 総会から約半月，帰国後10日間が過ぎた今，強烈な印象として思い起こされるのは，全会期中，午前午後の中休み毎に繰り返されたロビーの喧噪である．これは正に喧噪であって，休み時間が近づくと，会場の中にまでざわめきが侵入して来る．こちらも居ても立ってもいられなくなって外に出たが，その場の熱気に圧倒されて声も出ない，そんな焦燥感ばかりが思い出される．

それでも3日目頃からは気をとり直し，発表用のOHP シートをかかえて，少しでも顔（名前）見識りの人，聞いてくれそうな人に Discussion を申し込む―これが何よりの練習になった．それどころか個人的に話している方が，公式のセッションより面白くなってしまい，自分の本番の発表までも，二の次の気分になる始末だった．

こうして，「学問とは騒々しくやるものだ」と実感して戻った訳であるが，この騒々しさを支えているのは，第一には各国出席者のオープンな性格（初対面で，言葉も broken な若造の相手もしてくれる）であろう．しかし，これにも増して，研究者同志，日頃の情報交換や，直接の交流によって，個人的にもよく知り合っている為だとも思う．

ただでさえ人数不足といわれる日本の気象界であるけれど，せめて学会のロビーくらいは楽しく，真剣に騒げる様に……．先ずはぼく自身，直接・間接のコミュニケ

ーションの努力をしたい。（9月3日記）

IAMAP 雑感

気象研究所　山崎孝治

ホノルル空港での入国審査の長い列．その中に頭抜けて背の高い日本人が隣りの列に並んでいました．それはジャイアント馬場でした．多数の日本人観光客がおしよせるハワイに彼も私も仕事でくるのですから御苦労なことです．

私はジョイントセッション（JS-1）の ENSO の所で気象研究所大気大循環モデルによる初夏の El Niño 実験の話をしました。JS-1 は当初，1日半の予定でしたが，投稿論文数が多く2日にしたそうです．それだけ ENSO が流行している証左でしょう．次の El Niño がいつ起こるかも話題になり，来年（1986年）という人もあり，もっと先という人もありました．でも ENSO ブームは今が頂点でもう下り坂にさしかかっているのかも知れません．

会議は土地柄のせいもあって開放的雰囲気で進められました．ネクタイをした発表者など一人もおらず，ショートパンツの人もいました．私は背広をもっていったのですが一度も着ずに日本へ持ち帰りました．coffee break は午前と午後に一回ずつあり，coffee, tea 以外はパイナップルやグァバ・ジュースも飲めます．午後の break には何とビールもでました．日本で真似できるでしょうか．

世界各国から多数の科学者が集まり（Auther Index で調べると延べ投稿者数は約1,600名），同時に5つのセッションが進行するお祭りのような会議でしたが，その中で中国人パワーが目につきました．中国本土の人は仕事はまだ国際水準からみてそう高くはないが将来のびそうな雰囲気があり，アメリカに在住する（主に台湾からの）中国人は精力的で hungry な感じを受けました．日本は学問的水準はかなり高いのですが，もっと世界にアピールする姿勢が不足しているのではないでしょうか．もっと hungry 精神を！

IAMAP 印象記

気象研究所　伊藤朋之

シンポジウムの内容については同じく本誌に掲載が計画されており，ここでは全般的な印象を思いつくまま述べよう．

会場は休暇村ともいうべき Hilton Hawaiian Village の中にあった．会場から歩いて5分以内で，ショッピング，会食，ショー見物，海水浴，宿泊といった全てが間に合うというまことに便利な場所にある．会場のすぐ裏手は有名なワイキキビーチ．バカンスを楽しむ人の群と一緒とあれば勢い服装もラフになる．発表者がポロシャツにショートパンツなら，聴衆もTシャツにサンダルといった感じ．そんな気楽さが私にとっては，会場での質問やコーヒーブレイク中の議論を不必要な緊張もなくやれたことで，随分役に立ったように思う．

一番困ったのはプログラムの変更が多かったこと．語学力が充分とは言えない私には，座長がぼそぼそ言うプログラム変更の内容が聞き取れず，隣の人に「何って言ったの？」としばしば聞かなければならなかった．英語を通用語とする会議なら我々も相応の語学力を身に着ける努力をすることは当然であるが，一方英語を日常語とする人達も国際会議での講演では，仲間内の研究会と違って，ゆっくり明瞭に話すというマナーは徹底して守って頂きたい．

ポスターセッションは，5分程度の口頭発表の機会を与えるなど，工夫の跡は見えたが充分効果を発揮したとは言えなかった．ポスターを前にしての討論はコーヒーブレーク等残余の時間にということになっていて充分な時間がとられていなかったせいである．いくつか意見交換したいものがあったが発表者もシンポジウムを聴きに行って不在だったり，混んでいたりでできずに終わった．京都の MAP シンポジウムではポスターセッション中は講演が無く参加者全員が一度にポスターを見て廻り発表者と意見交換するという方式であったが，こちらのほうが有効であったような気がする．